

お尻目小僧の訃

昔、岩瀬村下柱田跡見塚から畑田に通じる道路は細い山道で、あたり一帯は松林でした。

小雨の降る夕刻、この道を通ると、見なれぬ男の子が、破れがさをさして長すそのまま、はだして畑田に向うのに出逢うことがあった。

子供にしては活気のない青ざめた顔でした。今頃どこへ行くのか不審に思つて振り返ると長命寺の付近でふわーっと消え失せてしまう。どうも不気味な感じだが誰もそのことを口にしない。

ある夕刻、例の子供に逢つた者が、長すそでは着物がよごれるので声をかけ、（この辺では尻をたくるといふが）すそをまくってやって、失神する程驚いた。

それもその筈、お尻に目玉そっくりのものが十もあるのである。

子供は無言のまま歩き出した。一つ目とか三つ目小僧という話はあるが、一体何小僧というのか恐しくてだまっておれなかった。

話が広がると、出会つた者がたくさんいる。それにあの不気味な顔と姿。いつもお寺の付近で消え失せるのを見ると、この世の人ではなく、何かの因縁で成仏できず、さまよっている子供の霊であろうという意見だった。

成仏させるには供養するより途がない。お尻の目玉を見た一人が地藏尊を建てようと話し出すと、みんなが賛成して六地藏を建てることになった。

山道の傍らにずらりと並んだ石地藏は子供達には薄気味悪いものであったが、それ以来子供の出現はぴたりと止んだ。

百幾十年の時が流れ、太平洋戦争は思いがけない敗戦で幕を閉じた。

激しい食糧事情のもと、安積疏水のサイホン工事や開田事業が行なわれ、石地藏は無惨に葬り去られて跡形もない。神や仏も何のご利益もなかったという憂さ晴らしが先走って、一人として止める者がなかったのである。

今はただ、子供の時分この道を通つたことのある人達によつて「地藏様にさしかかると、いつもぞーとした」と語り継がれている。